

川崎町の里山では、伝統的に、木を切って炭を焼いていました。そこで、みちのく公園「里山地区」でも昔のような炭焼き窯を作ることにしました。

通常、炭焼き窯（石窯）は石を積み始めると2、3日で完成します。そこで活動日以外にもボランティアの有志を募って炭焼き窯づくりを進めることにしました。結果的には台風の影響を受け、2週にまたいでの作業となりました。

9月13日（金）曇り

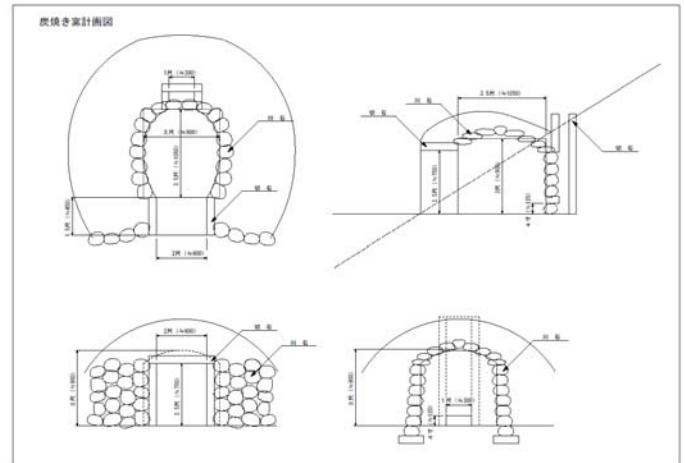
いよいよ炭焼き窯づくりを始めることとなりました。

炭焼き窯には土窯と石窯があります。今回は、窯の温度がより高温になり良質な炭（白炭）を焼くことのできる石窯を作ります。

まずは、川崎町の炭焼き名人の指導を受けて決めた計画地であるツリーハウス南側の斜面の表土をはぎ取り、炭焼き窯の大きさに人力で切土を行いました。



炭焼き名人の話を基に作った概略図



今回作る炭焼き窯は、通常よりひとまわり小さい
奥行：3.5尺×幅：3尺×天井高さ3尺としました。

9月14日（土）曇り

この日は、遊び塾の活動日です。参加者で手分けをし、石の運搬、粘土掘り、炭焼き窯づくりの補助作業などを行いました。

炭焼き窯（石窯）を作る材料は石と粘土のみです。里山には、炭焼き窯を作るのに適した石がないため、川崎町内から運んできましたが、粘土は里山の園路沿いの斜面で調達することができました。

石はトラックの入ることのできる主園路脇の広場に一端降ろし、そこからはキャリアを使って運びました。



炭焼き窯（石窯）づくりで最初に作り始めるのは、煙突の部分です。この部分には、整形された板石を使います。煙突部分の空気の流れ方によって良い炭ができるかどうかが決まる重要なポイントです。

次に石を楕円形に並べていき、炭焼き窯の大きさ、形を決めていきます。

炭焼き窯の大きさ、形が決まると玉石状の比較的小さな石で壁となる部分を垂直に積んでいきます。石と石の間には、粘土を詰めて固定していきます。

焚口部分に柱状の切り石を立て、この日の作業は終了となりました。

9月21日(土) 曇り

遊び塾ボランティアの有志が5人集まり、炭焼き窯づくりの作業の続きを行いました。

石積みが高さを増していくのに合わせ、背後の斜面を削り、炭焼き窯の周囲を埋め戻す作業を行いました。

石の繋ぎに使う粘土は、水を足して適度な硬さに練って使いますが、この作業もなかなかの重労働です。



焚口の両脇には一人では持ち上げられないほどの大きな石と丸太を組み合わせて土留めをしました。

炭焼き名人の手ほどきを受けながら、石積みにも挑戦しました。

9月22日(日) 曇り

壁部分の石を積み終え、この日は、床部分の石の敷き込みを中心に作業を行いました。窯の内側の狭いスペースでの作業では高さ関係が見えにくいため、外側から指示をしながら石を敷いて行きました。



垂直な壁(約 2.5 尺)が積み上がると、次に床の部分に石を敷いていきます。焼き上がった炭をスムーズに引き出すため、高さにばらつきがないように慎重に敷いていきました。

ドーム状になる天井部分の石を積み始めました。これまで壁に使っていた石より平たく大きな石を選び、少しずつ内側にずらしながら積んで行きます。

9月23日(祝) 曇り

いよいよ、炭焼き窯作りの最終段階です。天井部の石を徐々に中央に寄せるように積んでいきます。



天井部分は石をやや内側に傾けるように積んでいくのがポイントです。どうして石が落ちてしまわないのか不思議ですが、これが熟練の技なのでしょう。最後に要石を据えて石積みは完了しました。

石を積み終えた後、石の上から粘土で補強し、土を被せれば炭焼き窯(石窯)が完成です。



炭焼き窯は完成するとすぐに火を入れることで、乾燥し強度を増します。

